

海外ビジネス現地視察

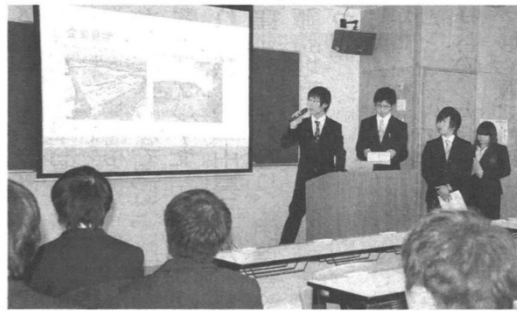
諏訪東理大 研修学生が報告会

諏訪東京理科大学(茅野市)は11月30日、経営情報学部「海外ビジネス研修」の報告会を同大で開いた。タイやインドネシアなどで長期滞在と短期滞在を経験した学生の代表者が研修先で得た成果や課題を発表した。

同大で2014年度から始まった選択科目。これから社会に出る学生たちに海外の企業での生の体験を通して海外で働く実感や目的意識を高めよう狙い。学生たちは諏

訪地方や県内の企業の海外拠点を訪問し、製造過程を見学したり、現地スタッフと交流したりして海外での働き方について学びを深める。

今年度から選択必修となり、これまで最多の男女14人が参加。長期研修(8月24日～11月5日)では男子学生1人、短期研修(8月～9月の約10日間)では4、5人グループの3班で計13人が学んだ。短期研修でタイを訪れたグループは宮坂ゴム(茅野市)



やセイコーエプソン(諏訪市)、八十二銀行(長野市)の海外拠点を視察。エプソンでは事前課題で調べた、出稼ぎのタイ人女性の1カ月の支出

諏訪東京理科大学経営情報学部の「海外ビジネス研修」報告会で発表する学生

額が想定していた額よりも大幅に少ないことを知り「3分の1は仕送りになる。食費は屋台が主なので安い。自宅にキッチンがないことにも驚き、日本文化とのギャップを感じた」などと発表した。

まとめとして「海外には大きなビジネスチャンスがあるという認識が日本企業には低いのではないか。新しい場所で働く自信の獲得が今後、必要だと感じた」と話した。

(樋口美世子)